

文化 第八十一卷 第一・二号  
平成二十九年九月二十五日発行  
― 春・夏 ― 別刷

# 『平家物語』における秩序の形成

― 後白河院と源頼朝の関係に着目して ―

于

楽

# 『平家物語』における秩序の形成

## ― 後白河院と源頼朝の関係に着目して ―

はじめに

于

楽

『平家物語』は、人々が対立する争乱の世の出来事を記した物語であり、そこで争乱の世を鎮めるのは後白河院と源頼朝が担う強大な権力と武力である。しかし、『平家物語』は、権力、武力よりも、人と人が親しみ合い、支え合う親和的な関係を尊び重んじている。そうした表現世界において、規範を体现するのは、対立とは無縁の存在とされている高倉院である<sup>(1)</sup>。権力の担い手である後白河院も、高倉院の慈父として子を感じる姿、子との離別を悲嘆する姿が描かれることで親和的な在り方を示している。『平家物語』は多くの対立や不和を語りながら、人と人々が親しみ合う親和性こそが世の秩序を支えるものと捉えている。

このように親和性を重んずる観点に立つて、『平家物語』は、後白河院と頼朝が権力と武力によって秩序を

形成する実態をいかに描いているのだろうか。物語のなかで、後白河院も頼朝も、敵対する者を排除するために進んで対立や戦いを起こすことが語られている。しかし一方で、二人の協力と互いの自制も記されるように、単に強権を行使して秩序を形成した人物とは捉えられていない。これは、親和性を重んずるがゆえの記述と考えられるが、『平家物語』は、後白河院と頼朝との両者の関係をどこまで親和的なものとして描き得ているのだろうか。

本稿では、このような関心をもって、後白河院と頼朝との関係に注目し、そこに現れている親和性の内容と意味を考察する。『平家物語』における、権力と武力が支配する世界のなかで、親和性がどのような意味を持つのかということを、諸本の異同に留意しながら検

討していく<sup>(2)</sup>。なお、論述のなかで注目したり、引用したりする『平家物語』の記述は、特に断りがない限り、竟一本の本文に拠ることとする。

## 一 福原院宣の虚構による秩序の形成

『平家物語』の頼朝は伊豆での挙兵をめぐって初めて登場し、その挙兵は後白河院との緊密なかわりにおいて語られている。頼朝に挙兵を促すのは文覚だが、彼に挙兵を決心させるのは後白河院の院宣である。作中、頼朝は、文覚の尽力によってもたされた平家追討を命ずる院宣に向かって、「手水うがひをして、あたらしき烏帽子・浄衣きて、院宣を三度拝してひらかれたり」(巻第五「福原院宣」)と、至上のものと遇し、「錦の袋にいれて」、合戦の時にも「頸に懸け」たという<sup>(3)</sup>。このような記述が示すとおり、『平家物語』における後白河院の院宣は頼朝の運命はもとより、世の帰趨を決定づける重要な意味を持っている。

ところが、福原で発せられたとされる院宣は、以前から指摘されているとおり、歴史上実在しなかった虚構である。史実において、頼朝が挙兵の抛りどころにしたのは、以仁王の令旨である<sup>(4)</sup>。『平家物語』の後白河院の平家追討を命ずる記述は、「頼朝の挙兵に大

義名分を与えるための最大の虚構」<sup>(5)</sup>とも指摘されているとおり、頼朝の挙兵を正当化する絶大な効力を持つ。後白河院に命じられてはじめて平家に「反旗を翻す」という頼朝の描かれ方は、「將軍が朝敵を討つことによつて國家が安泰である」<sup>(6)</sup>という構図を確固としたものにしてゐる。史実として後白河院が頼朝を正式に承認したのは、約三年後の寿永二年(一一八三)十月宣旨によつてである<sup>(7)</sup>。平家打倒に立ち上がった頼朝や義仲などの諸勢力の動静を後白河院が見定めて、鎌倉を中心に東国での支配を確立していた頼朝を追認したのである<sup>(8)</sup>。『平家物語』は、このような経緯を捨象して、治承・寿永の乱を、後白河院と頼朝との君臣の協力のもとで一貫して遂行され、朝敵である平家を追討したという枠組みにおいて語っている。

このように福原院宣の発給という虚構が、頼朝の挙兵を正当化していることは間違いないが、それに加えて重要なのが、頼朝が平治の乱により勅勘を受けて流人となっている身のほどを謙虚に自認し、一旦挙兵を自重していることである。巻第五「福原院宣」の段で、文覚が挙兵を勧めた時に、頼朝は「抑頼朝勅勘をゆりずしては、争か謀反をばおこすべき」と述べている。名分にもとづいて自身の立場を弁えた発言である。『平家物語』の頼朝は、勅勘を受けた流人の身で挙

兵することを不当と考えている。

頼朝は作中でしばしば「流人」と称されている。それが最初に現れるのは、巻第三「行隆之沙汰」の段である。治承四年（一一八〇）十一月の平清盛による後白河院政を停止するクーデターが起こり、関白藤原基房が配流されるに至った際に、基房に仕える大江遠成も捕らえられようとするなか、遠成は、「東国の方へ落くだり、伊豆国の流人、前右兵衛佐頼朝をたのまばや」と思いつつも、「それも当時は勅勘の人で、身ひとつだにもかなひがたうおはす也」と考えて、東国に逃れずに、あえて京へ引き返し、平家の軍勢と戦い、子の家成とともに自害する。このような大江遠成の思惟を通して、頼朝が頼むべき人物でありながら、勅勘を受けた流人であるがゆえに、それがかなわないことが明示されているのである。また、巻第四「源氏揃」の、源頼政が以仁王に挙兵を促す場面では、協力を望める源氏の一人として頼朝の名が挙げられるが、それでも、頼朝は「流人前右兵衛佐頼朝」と称されている。この場面での頼朝が「流人」であることへの言及は、語り本にのみ見られるものだが、読み本でも、頼朝の挙兵の報が清盛に伝えられる場面でも、語り本と同様に「伊豆国流人、前兵衛佐源頼朝」（延慶本・巻第四「右兵衛佐謀叛発ス事」と呼ばれているように、『平

家物語』諸本では、総じて頼朝を「流人」と称している。作中の頼朝も「争か謀反をばおこすべき」と自ら述べているとおり、『平家物語』では、流人のままで挙兵することは許されないことであった。

流人が公権に背く挙兵をしたのでは、それは「朝敵」に外ならない。巻第五「早馬」の段では、大番役で在京中の畠山重能らが、東国の情勢を述べるなかで、「自余の輩は、よも朝敵が方人をば仕候はじ」と語っているように、福原院宣のことを知らない身からすれば、頼朝は朝敵に外ならない。この「早馬」の段の時点では、福原院宣のことはまだ作中で何も語られておらず、この段に続く「朝敵揃」と「咸陽宮」では、朝敵が必ず滅びることを強調し、「咸陽宮」の末尾では、「秦の始皇はのがれて、燕丹つゝにほろびにき。されば今の頼朝も、さこそはあらんずらめ」と、平家に「色代する人」との口を通して頼朝の挙兵の失敗が予測されている。このような記述は、一見すると後に語られる頼朝による挙兵の成功と矛盾しているようだが、ここでの物語の意図は、頼朝個人に対する批判ではなく、朝敵としての謀反を不当と意味づけることに向けられている。『平家物語』は不当な自力救済を許容しない姿勢を明示し、それが必ず失敗に終わるというメッセージを表現世界に響かせようとしている。

そして、頼朝が流人としての勅勘を解かれ、朝敵でないことを語るのが「福原院宣」の段である。そこに登場する頼朝が先述の物語の論理を内面化している存在として描かれていることは、きわめて重要である。『平家物語』は頼朝の挙兵という行為を、それに至る心の動きも含めて正当化している。

さらに、頼朝の正当化はそれにとどまらない。『平家物語』の頼朝は、平家に敵対することになったく意欲的ではない。物語は、流人であることを自覚し、対立を起こそうとしない言動を記すことで、頼朝を世の秩序を担うにふさわしい人物として造型している。「福原院宣」の段で、文覚に挙兵を勧められた時にも、はじめに、「思ひもよらぬ事の給ふ聖御房かな。われは故池の尼御前に、かひなき命をたすけられたてまつて候へば、その後世をとぶらはんために、毎日に法花経一部転読する外は他事なし」と、平家には恩義こそあれ、敵意はないことを示している。滅罪生善の經典である『法華経』を毎日読誦すると述べているところにも、報恩の思いの深さとともに、謙虚さ、慎み深さが現れている。ここでの頼朝の発言は、文覚をまだ信用できずに真意を包み隠していると読むこともできるが、この発言が虚言とされているわけではない以上、物語が示そうとしている内容を文字どおりに捉える必要がある

る。少なくとも、以仁王の令旨を受けて進んで挙兵した史実の頼朝とは大いかけ離れている。

『平家物語』の頼朝も最終的に平家に反旗を翻すことになるが、それは彼が戦うことを望み、平家の恩を仇で返そうとしたのではなく、後白河院の命に服した結果とされているのである。『平家物語』の頼朝は、勅勘を受けた流人としての身を自覚するだけでなく、平家に恩義を感じ、戦いを好まない人物とされ、彼の挙兵は至って受動的になされたものと意味づけられている。福原院宣をめぐる表現は、頼朝の挙兵を正当化し、將軍が朝敵を平らげるという構図をもたらすとともに、対立や戦いを好まないという親和性を頼朝に付与するものになっている。このような慎み深く自制する頼朝の言動は、理想的な為政者とされている高倉院の造型に通ずるものであり、頼朝が秩序を体现する者として適格であることを示している。『平家物語』は、頼朝の挙兵を正当化するに際して、架空の院宣によって公的な妥当性を付与するとともに、他者との対立を望まない頼朝の姿勢を語ることで、彼の秩序の体现者としてのすぐれた資質を強調している。

『平家物語』の頼朝は名分と報恩にこだわる人物であり、覇権を求める強者ではない。むしろ力なき者として描かれていることが、頼朝に秩序の体现者として

の正当性をもたらしている。読み本が詳述する石橋山での敗戦とその後苦難も、頼朝の為政者、將軍としての適格性を損なうことなく、むしろそれを高めている。受苦が秩序の体現者としての資性を強めることになっているのである。

このような、弱者の側に正当性を認める『平家物語』の特質は、延慶本、源平盛衰記、源平闘諍録の「頼朝伊豆流離説話」<sup>(9)</sup>と称される頼朝の伊豆での蟄居に関する記述にも現れている。これは、『曾我物語』にも見られる話だが、伊東助親の娘との秘めていた相思相愛の關係が発覚することで、助親によってその仲が裂かれ、頼朝は命を狙われ、二人の間に生まれた男児千鶴も殺害されるといふ、頼朝の受苦が語られている。さらに、この後も、北条政子との相思相愛の仲が裂かれようとするなど、頼朝の試練は続き、その渦中で挙兵が実行に移されていく。延慶本などの語る、このような流人としての受苦、受難は、頼朝の悲嘆を際立たせる表現となっており、その弱く、よるべない流人としての記述は、頼朝の覇者としての印象を弱め、彼の挙兵をいっそう正当化し、為政者、將軍としての正当性を疑わせるどころか、将来、為政者、將軍となることを保証する意味を持っているのである。ただし、この流人としての受苦、受難を語る話に

において、我が子千鶴を殺された頼朝が「歎ク心」とともに、「イカレル心」を持ち、「助親法師ヲ討ムト思フ心、千度百度有」(延慶本・巻第四「兵衛佐伊豆山三籠ル事」)と、伊東助親に対する強い報復の念を抱いていることには注意する必要がある。こうした報復の念は、敵対をためらう親和性とは相いれないところがある。文覚が挙兵を促す場面の記述にも、父義朝への頼朝の深い思いが現れている。覚一本では、文覚が義朝の首と称する髑髏を見せたときには、「父のかうべときくなつかしさに、まづ涙をぞ流されける。其後はうちとけて、物がたりし給ふ」と記されているように、文覚の策略は効を奏して、挙兵に対する頼朝の抵抗感を緩和することになる。このように、語り本では、報復の思いまでは語られていないが、父義朝への思いという私的な契機が頼朝の挙兵を促したように描かれている<sup>(10)</sup>。

さらに、延慶本、長門本、四部合戦状本などでは、頼朝が流人という自分の立場と平家から受けた恩を挙げて挙兵を表面上辞退する一方で「多年ノ宿望ヲ遂テ、且ハ君臣ノ御鬱ヲ休メ奉リ、且ハ亡夫ガ素懷ヲ遂ム」<sup>(11)</sup>(延慶本・巻第五「文学兵衛佐ニ相奉ル事」)と、心中、ひそかに、自身の「宿望」と亡父の無念を晴らすために、進んで平家を討とうという意志を持つ

## 二 征夷將軍院宣の虚構による秩序の形成

ていたとされ、文覚から受け取った義朝の首と称する髑髏に向かつて、「頼朝世ニアラバ、過ニシ御恥ヲモ雪メ奉リ、後生ヲモ助奉ラム」と、義朝の無念を晴らすことを誓ったとされている。延慶本などでは、頼朝の流人としての受苦、受難が詳述されることと、平家への報復の思いを明示することが対応しているものと考えられる。それが、覚一本に至ると「父のかうべときくなつかしさ」だけが記述されるようになったのである。しかしながら、このように報復の念が希薄になっている覚一本でも、父への思いが拳兵を決心する契機になっているところに、院宣に従うという公的な正当化の枠に収まりきらない私的側面が露呈している。そこに、福原院宣の虚構をもってしても、糊塗することのかなわなかった史実のなかの頼朝像の根強さがうかがわれる。

ただし、覚一本に顕著なように、亡き父の思いを受けとめようとするという一点を除いて、頼朝の拳兵を公的な行為として正当化するところに、『平家物語』の公的秩序を重んずる名分意識の強さと、親和性を尊ぶ希求の深さが現れている。この公的秩序とそれを支える親和性を尊重する意識が創出した切札が、福原院宣という虚構だったのである。

『平家物語』には、これまでに見た福原院宣と並んで、頼朝に正当性を付与するもう一つの重要な虚構がある。それは、頼朝を征夷將軍に任命する後白河院の院宣である。『吾妻鏡』によると、頼朝の征夷大將軍拜命は後白河院の没後の建久三年（一一九二）のことであるが、『平家物語』はそれを寿永二年（一一八三）へと九年も繰り上げている。『平家物語』では威儀正しく院宣を受け取る頼朝の姿が描かれるとともに、院宣の使者の中原泰定によってその様子が後白河院に報ぜられることが記されている（巻第八「猫間」）。この記述には、將軍が王権を守護するという物語の枠組みが明示されている。とりわけ、語り本では、「法皇も御感ありけり。公卿・殿上人も、皆あつぽにいり給へり」と、頼朝の振る舞いに感心する後白河院と貴族たちの姿も描かれており、京の後白河院と鎌倉の頼朝とが協同して新たな秩序を成り立たせていることを示している。

この院宣にかかわる虚構は「院の王権は武門と協調して初めて末法の世を治めることができ、武門もまた院と調和的関係を結ぶことによって体制を保つことが

できるといふ政治思想」<sup>(12)</sup>を反映したものととして重要であるが、それとともに、頼朝自身が征夷將軍の地位を望んだとはされていないことが注目される。巻第八「征夷將軍院宣」は、「さる程に、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、ゐながら征夷將軍の院宣を蒙る」と書き出されており、院宣が発せられるに至る経緯についてはまったく述べられていない。院宣の発令がすべての発端とされている。後白河院によるこの院宣がまったくの虚構であるだけに、そうした書き方しかなし得なかったのではないか。

頼朝の征夷將軍任命について『吾妻鏡』の記録を確認すると、「將軍叟本自雖被懸御意于今不令達之給而 法皇崩御之後朝政初度殊有沙汰被任之間故以及勅使云々(將軍の事、本より御意に懸けらると雖も、今に之を達せしめ給はず。而るに、法皇崩御の後、朝政の初度に、殊に沙汰有りて任ぜらるる間、故に以て勅使に及ぶと云々)」(『吾妻鏡』卷十二・建久三年七月二十六日条)と、頼朝が征夷將軍の地位を自ら欲しながらも、後白河院の存命中はそれがかなわなかったことが記されている。後白河院が頼朝の征夷將軍任命を認めなかったと考えるのが妥当であらう。

しかし、『平家物語』は、史実とは異なり、頼朝が征夷將軍への任官を求めたとは語らず、後白河院の意

志により將軍に任ぜられたとしている。將軍任命の院宣を受けると決まった時に、頼朝は、「頼朝年来勅勘を蒙ったりしかども、今武勇の名誉長ぜるによつて、ゐながら征夷將軍の院宣を蒙る」と語つたとされるが、権力や名譽に対する執着を見せていないどころか、「勅勘を蒙ッ」た自身の過去を再認識する言葉さえ述べている。『平家物語』は、このように公に従順で野心を持たず、権力に執着しない頼朝こそが秩序を担うにふさわしい理想的な人物であるとする脚色を行っている。征夷將軍院宣の虚構は、頼朝の戦闘行為を將軍によるものとして正当化していることはもとより、無私無欲な頼朝の側面を語り出して、秩序を体現する適格者として彼を仕立て上げるものとしても重要である。

また、『吾妻鏡』の記録からわかるように、頼朝の実際の將軍就任は、後白河院の崩御の直後の建久三年(一一九二)七月のことである。先述のとおり、後白河院の意志によつて頼朝の將軍就任が阻まれていたと推測されるが、その背後には、頼朝が朝廷のある京に対する新たな中心を鎌倉に樹立することを警戒する院の思惑があったと考えられる<sup>(13)</sup>。しかし、『平家物語』はそのような権力者の間の緊迫した政治的な駆け引きを記述のなかに取り入れていない。あくまでも、この二人の協力的な関係を語り出し、後白河院の意志

を代行する將軍頼朝が、秩序を乱す勢力を次々と征圧していくという明快な構図を作り上げている。源義仲も平家も、後白河院の命を受けた將軍頼朝が、將軍の任務を遂行するなかで討たれたことになる。このように、征夷將軍院宣にかかわる虚構によって、頼朝も後白河院も政治的な野心をもって対立を起すような人物ではなく、王と將軍として正當に秩序を体现しているとされている。

こうした『平家物語』の記述においては、征夷將軍院宣にかかわって京都と鎌倉の間の勅使の往還が語られるなど、京に加えて、鎌倉という新たな政治の中心が生まれ、中心が複数化していることが現れるが、それは特に問題にされていない。頼朝が征夷將軍の地位に着くと、「鎌倉の前兵衛佐」、「鎌倉殿」と、鎌倉を拠点とする統率者としての呼称が用いられるようになるが<sup>(14)</sup>、そうした呼称の変化は、鎌倉という新たな中心の形成を示すものに外ならない。征夷將軍院宣にかかわる記述には、中心の複数化という時代状況が反映しているが、その事態は京の朝廷の權威を相対的に弱めるものでもある。しかしながら、『平家物語』のこの時点の記述には、京と鎌倉の二つの権力が対立し、秩序が混乱するような状況はまったく現れない。それも、福原院宣と征夷將軍院宣をめぐる記述のなかで、後白河院と頼朝の親和

的な側面が強調され、両者が秩序の正當な体现者とされていることによるのである。

### 三 秩序の批判者としての平重衡の登場

『平家物語』では、巻第八「征夷將軍院宣」の段の記述から、京都に加えて鎌倉という新たな中心が現れることが示されるが、それをいっそう明確にするのが、一の谷合戦で囚われの身となった平重衡の処遇をめぐる記述である。捕えられた重衡は京に連れ戻されて大路を渡され、さらにその後鎌倉に下されることになるが、重衡が関東に行くことになった事情については、頼朝が「頼に申され」たのを後白河院が「さらば下さるべし」と認めたとする経緯がわずかに記されているだけである（巻第十「海道下」）。『平家物語』は、頼朝が重衡の鎌倉への連行を要請した意図について何も言及しておらず、後白河院がそれを認めた意図も記述していない。「頼に」という表現があることから、頼朝が重衡の連行をくり返し強く望み、後白河院がすぐにはそれを認めなかったため、幾度も交渉があったという事情も読み取れそうだが、そうした事情は表面化していない。

この重衡の鎌倉への護送は、歴史上実際になされ

たことであるが、頼朝が望まなければ、行われなかったことである。それが行われたのは、壇浦合戦で捕虜にされた平宗盛・清宗父子の鎌倉への連行と同様に、鎌倉を拠点とする頼朝の権勢の誇示を意図したためであったと考えられる。一の谷合戦後の重衡の鎌倉への召喚は、頼朝にとって、自己の権力を可視化する絶好の機会であった。そのような頼朝の持つ政治的な意図は『平家物語』で明示されることはない。『平家物語』は政治の中心の複数化を提示していながらも、頼朝の意図や院と頼朝の交渉の内容に触れず、その複数化の背後にあったかけ引きや意見の齟齬を表面化させないような記述を行っている。とりわけ、重衡を召喚した頼朝の意図を語っていないことは、頼朝の覇者としての、報復者としてのあり方を隠蔽し、親和性を損なわないようにしているという意味できわめて重要である。しかし、敗者として勝者頼朝の前に引き出されるという恥辱を受ける重衡の立場に寄り添う時、頼朝の隠されている政治的意図は批判の対象となる。『平家物語』が頼朝と重衡との対面の場面を語ることは、親和性と相いれない頼朝の意図を露呈させる危険を含んでいた。

鎌倉に到着した重衡と頼朝の対面は、巻第十「千手前」に語られる。この対面の場面で、重衡は、後白河

院と頼朝に対する批判者として登場している。頼朝は重衡を前にして、自身の挙兵が「君の御いきどをりをやすめ奉り、父の恥をきよめん」がためであると述べてその正当性を主張した上で、重衡の南都焼失の責任に言及する。ところが、非難を受けた重衡は頼朝の発言に反論し、後白河院と頼朝が作り上げた秩序に対して批判を向ける。

当家は、保元・平治より以来、度々の朝敵をたいらげ、勅賞身にあまり、かたじけなく一天の君の御外戚として、一族の昇進六十余人、廿余年の以来はたのしみさかへ申はかりなし。今又運尽きぬれば、重衡とらはれて、是まで下候ぬ。それにつひて、帝王の御かたきを討つたるものは、七代まで朝思うせずと申事は、きはめたるひが事にて候けり。まのあたり故入道は、君の御ためにすでに命をうしなはんとすること度々に及ぶ。され共、纔に其身一代のさいはいにて、子孫かやうにまかりなるべしや。されば運尽きて都を出し後は、かばねを山野にさらし、名を西海の浪に流すべしとこそ存ぜしか。これまでくだるべしとは、かけても思はざりき。唯先世の宿業こそ口惜候へ

ここで、重衡は、父清盛をはじめ平家が朝家のため

に、命を失う危険を冒して朝敵を討つ功績を重ねてきたことを強調し、本来ならば、そうしたまさに献身的な平家の忠誠が重んじられて、久しく朝恩を蒙り、栄華が約束されるはずなのに、後白河院に背かれて逆に追討を受けることになったという皮肉な顛末を深く悲嘆し、激しく非難している<sup>(15)</sup>。これは後白河院に向けてられた非難であるが、頼朝への辛辣な批判にもなっている。重衡が言う、平家が平らげてきた「保元・平治」以来の「朝敵」には、頼朝本人も、頼朝の父、義朝たち一族も当然含まれている。重衡は、後白河院がかつて討つようと平家に命じた「朝敵」頼朝と、新たに結託して平家を討とうとしていることを鋭く指摘している。「朝敵」は自分たち平家ではなく、もともとの「朝敵」は頼朝であると主張していることになる。

この重衡の発言の記述は、『平家物語』が、福原院宣と征夷将軍院宣という二つの院宣の虚構によって築き上げてきたものを、敗者重衡の立場と心情に寄り添うことで相対化しているという意味できわめて重要である。この敗者重衡の、勝者頼朝に対する容赦ない反論は、後白河院と頼朝の二人による秩序の形成を揺るぎないものとして語ってきた物語の論理自体に鋭い疑問を呈している。

この頼朝と重衡の問答の場面に現れる、弱者が強

者を批判するという構図は、『平家物語』を考える上で重要な意味を持っている。『平家物語』は、福原院宣と征夷将軍院宣の虚構において、史実をいともたやすく捨象して、頼朝を正当化し、後白河院と頼朝との協調態勢をもって、あるべき秩序が形成されてきたことを語ってきた。しかしながら、一の谷の戦いで自害することもかなわず、不本意にも囚われの身となり、その落ちぶれた姿を京中の人々の前に晒されて大路を渡され、さらに鎌倉の頼朝に召喚されるという恥辱を蒙った、ひとりの捕虜としての無力な重衡に、『平家物語』はあえて後白河院と頼朝への批判を語らせ、自らが形成してきた秩序の枠組みを揺るがすに至っている。重衡は、もはや無力であるがゆえに、勝者としての力を誇示する頼朝を批判する正当性を獲得し、強者が形成した秩序の理不尽さを暴露する資格を得ているのである。

先述のとおり、『平家物語』の頼朝は、無力な流人であつたがゆえに、秩序の体現者となるにふさわしい正当性を有していた。その頼朝が、弱者に寄り添うことを忘れ、強者としてのふるまいを示したところで、重衡の痛烈な批判を浴びているのである。『平家物語』の弱者を擁護し、弱者への配慮を欠いた強者を批判する性格には根強いものがある。そして、重衡の批判を

受けた直後に、頼朝は勝者であることを誇示する姿勢を改める。重衡が頼朝への反論を述べ、さらに、「只芳恩にはとく／＼かうべをはねらるべし」と言い放つと、それを聞いた居並ぶ人々はみな心を動かし涙を流す。頼朝も「平家を別して私のかたきと思ひ奉る事、ゆめ／＼候はず。たゞ帝王の仰こそおもひ候へ」と、重衡に向かって、平家への敵対心がないことを示し、その後は、重衡の身を「なさけある」狩野介宗茂に預け、宗茂は、重衡を「やう／＼にいたは」ったとされている。重衡と千手前が、管絃と朗詠を楽しむ一時を過ごしたという話も、この後に現れる。頼朝は、一旦は、重衡の反論を受けるものの、敵対心を和らげ、勝者として敗者に臨む姿勢を改めて、親和性を取り戻している。また、先に挙げた「たゞ帝王の仰こそおもひ候へ」という頼朝の言葉には、後白河院の意向を尊ぶ思いが現れており、後白河院と頼朝との親和的な関係が改めて強調されている。

後白河院と頼朝との協調的な関係は、重衡の出家をめぐる記述にも現れている。重衡が囚われの身となった後に、京で出家の願望を述べた時には、後白河院が「頼朝に見せて後こそ、ともかうものはからはめ。只今はいかでかゆるすべき」と応じている（巻第十「戒文」）。また、重衡が鎌倉で頼朝に出家を願ひ出た時に

は、頼朝が「それ思ひもよらず。頼朝が私のかたきならばこそ。朝敵としてあづかりたてまつたる人なり」と述べている<sup>(16)</sup>。後白河院と頼朝の言動は互いの意向を尊重するものとなっている。征夷將軍院宣の虚構などと同様に、京の朝廷と鎌倉の頼朝との二元的な政治構造が、その二元性ゆえの本質的な溝を露呈させることなく、協調的なものとして描き出されている。

しかし、『平家物語』は、征夷將軍院宣の虚構とは異なり、重衡をめぐる対応においては、後白河院と頼朝との間の親和性の限界をうかがわせていることもまた事実である。それは、重衡の出家の願いが実現しないところにも現れている。後白河院は頼朝の意向を重んじ、頼朝は後白河院の意向に憚るなかで、結局、重衡の切なる望みはかなえられず、重衡は出家することなく、奈良で斬首されているのである。重衡にとって、後白河院と頼朝が作り上げた秩序は、自らの願いを受け止めるようなものではあり得なかったのである。

さらに、頼朝がいかに重衡の思いに寄り添うようにいたわったとしても、鎌倉への連行が、重衡を利用する政治的意図によるものであり、重衡に恥辱をもたらすものであるということは動かない。先述のとおり、頼朝が重衡に「君の御いきどをりをやすめ奉」ることに、「父の恥をきよめん」がために挙兵したと

語っていることからすれば、重衡を鎌倉に召喚したのは、父義朝の無念を晴らさんがための報復とも捉えられるのである。頼朝が後白河院に「頻に申され」て重衡を召喚したことには、重衡本人への一片の善意も認められないのである。

囚われの身となった重衡の立場から捉えた時、頼朝が決して親和的な存在ではないことが露呈する。そこには、弱者に寄り添うことのない、善意なき秩序が浮かび上がるのである。

#### 四 秩序のゆくえ

『平家物語』では、後白河院と頼朝が親和的に協調するところに秩序が立ち現れる。巻第十の囚われの身となった重衡の処遇をめぐる記述には、秩序の二元化とそれを助長する頼朝の動静が垣間見えたが、そうした問題の表面化は抑えられていた。しかしながら、後白河院と頼朝による体制の側が壇浦で平家を滅ぼした後の出来事を語る物語の最終盤になると、後白河院と頼朝の対立を語る記述や、権勢を掌握した頼朝の非情さ、酷薄さを示す記述が現れる。このような記述は『平家物語』にとってどのような意味を持つのであろうか。

『平家物語』の壇浦合戦後の記述のなかで、まず注目されるのが、頼朝と義経の対立である。この兄弟の反目を語る記述自体が、頼朝の親和性を損なうものがあり、巻第十一「腰越」の段には、平宗盛・清宗父子を鎌倉まで護送してきた義経に会おうとしないばかりか、「随兵七重八重にすへをいて、我身はそのなかにおは」すという厳戒態勢を敷き、「九郎は進疾男なれば、このたゞみのしたよりもはひ出でんずるもの也。たゞし頼朝はせらるまじ」と述べて義経に対する過剰な警戒心を示す頼朝が登場する。このような保身のみに心を傾ける頼朝を誇張して描くところに、『平家物語』がもはや頼朝を賞讃する意図を持っていないことが現れている。義経が兄への切なる思いをしたためた「腰越状」も頼朝の心を動かすことなく、むなしく京に戻った義経に対して、巻第十二「土佐房被斬」では、頼朝が梶原景時の讒言を信じ、進んで討とうとし、土佐房を遣す。この企ては失敗するが、頼朝と、土佐房を討ち取った義経との対立は決定的となる。

また、このような頼朝と義経との対立を描くなか、巻第十二「判官都落」の段で、頼朝が弟範頼に義経を討つことを命じたところ、範頼がこれを辞退したため、頼朝に逆心ありと疑われ、百日に千枚の起請文を書いて申し開きをしたものの、その甲斐もなくついに

討たれてしまったことが語られている。実際に範頼が討たれたのは、この文治元年（一一八五）の八年後の建久四年（一一九三）のことであるが、この虚構は征夷將軍院宣の虚構とは正反對に、頼朝への批判を強めるものとなっている。ここには、頼朝の疑り深く非情な態度がことさらに明示されている。

そして、頼朝の命を受けた北条時政の軍勢が京に迫る状況において、頼朝と義経との対立に後白河院が巻き込まれることになる。巻第十二「判官都落」の記述によると、頼朝の派遣した軍との戦いを避けて、鎮西に一旦逃れることを意図した義経は、後白河院による院庁の下文の発行を願い出る。後白河院は「此条頼朝がかへり聞かん事いかゞあるべからん」と思い悩むものの、義経が京にいて、鎌倉の大軍が乱入することによる「狼藉」の出来を危惧した公卿たちの進言を受けて、義経の申請どおり、院庁の下文を与えたという。その下文の内容は、「頼朝をそむくべきよし」を記したものであったとされる。ここで、やむを得ないこととされながらも、『平家物語』は、後白河院と頼朝との敵対的な関係を記すに至っている。

ただし、史実においては、この両者の対立はいっそう深刻なものであったようだ。『愚管抄』の記述によれば、義経に肩入れした後白河院は「頼朝可追討宣旨」を

下している（巻第五）。「頼朝をそむくべきよし」の院庁の下文と、頼朝の追討を命ずる宣旨とでは、重みも違えば、発令内容の重大さも異なる。『平家物語』の、特に語り本は、後白河院と頼朝との対立を明らかに緩和して描き出そうとしている。史実では、『玉葉』、『吾妻鏡』が記すように、この宣旨に怒った頼朝が、後白河院を「日本國第一之大天狗」と罵倒したと伝えているが、『平家物語』にはそれは語られていない<sup>(17)</sup>。なお、読み本では史実を反映する形で、院庁の下文ではなく、「頼朝ヲ可追罰之由院宣」（延慶本・巻第十二「義経可追討之由被下院宣事」）が発せられたとしており、語り本に比べ、後白河院と頼朝の緊迫した関係が際立っている。

そうした読み本でも、後白河院と頼朝との対立関係を史実より緩和した形で記述しているが、『平家物語』は、語り本も、読み本も、以前に福原院宣や征夷將軍院宣の記述でなしたような虚構を、巻第十一では行おうとはしていない。それは、後白河院と頼朝との対立を記すことがもはや避けがたくなっていることを示すとともに、対立を描かないようにしようという意志が失われてしまっていることを意味する。

「判官都落」の段に続く「吉田大納言沙汰」の段では、頼朝が後白河院に惣追捕使に任ぜられて兵糧米を

宛てられることを強く要求し、後白河院がこの要求を受け入れがたいと思いつつも、「頼朝卿の申さるゝ所、道理なかばなり」とする公卿僉議の決定もあって、頼朝の主張を認めることが語られている。京の朝廷と鎌倉の頼朝との秩序の二元化に伴う、後白河院と頼朝との間の、統治をめぐる意見のずれはついに表面化してしまっている。こうした齟齬を覚一本以外の諸本はいっそう顕在化させており、屋代本、百二十句本では、「源二位ノ申状過分也」という意見を「人々」が語ったとして、後白河院を中心とする朝廷と、頼朝とが全面的に対立する構図となっており、最終的に後白河院が頼朝の執拗な要求に屈したとされている（屋代本・巻第十二「源二位頼朝日本国惣大将惣地頭被補事」、百二十句本・巻第十二「義経都落」。源平盛衰記ではさらに「道理ハサモ有ケレトモ當時ノ威應ニ恐テ任申請旨」と、完全に院が屈服した形で頼朝の要求を認めたこととなっている（巻第四十六「時政実平上洛」）。

このように、これまで福原院宣の虚構、征夷將軍院宣の虚構などによって、親和的な秩序の形成を語ってきた『平家物語』をもってしても、壇浦合戦後の秩序の二元化の進行を覆い隠せなくなっている。それでも、後白河院と頼朝との対立を何とか緩和して描こう

としているところに、秩序に親和性をもたらしうとする『平家物語』の特質を見ることができる。

しかしながら、この記述に親和性を取り入れようとする志向は、秩序の体现者としての頼朝の造型において、物語の最終盤に至り、大きく頓挫する。先にも、弟の義経、範頼に非情な姿勢で臨む頼朝が描かれているのを見たが、さらに、それに加えて、平家の子孫たちを次々と亡き者にしていく残酷な頼朝のあり方が集中的に語られていくのである<sup>(18)</sup>。頼朝の命を受けた北条時政の「策」により、「勳賞」を望んだ「京中のもの共」が平家の子孫を「尋もと」めた結果、平家と無縁な子供までもが摘発され、「無下におさなきをば水に入、土にうづみ、少おとなしきをばおし殺し、さし殺す」という残酷な殺害が次々と行われ、殺された子の母やめのとがたとえようもなく嘆き悲しんだという。

こうした頼朝の酷薄な行為は、生き残った平家の人々の報復への過剰な恐れによるものである。頼朝は、文覚が助命を願い出て預かった「平家の嫡子」である六代に対しても恐れを抱き、文覚に「昔頼朝を相し給ひしやうに、朝の怨敵をもほろぼし、会稽の恥をも雪むべき仁にて候か」と問うている（巻第十二「六代被斬」）。さらに、重盛の子、忠房に対しては、頼朝

が「小松殿の君達の、一人も二人もいき残り給ひたらんをば、たすけ奉るべし。其故は、池の禪尼の便として、頼朝を流罪に申なだめられしは、ひとへにかの内府の芳恩なり」と述べて、鎌倉に召喚し、対面後に京へ向かって上らせておいて、勢田の橋の近くで斬首している。このように、手段を選ぶことなく、自らの権力に害を及ぼす可能性のある人物を排除しようとする頼朝には、微塵の親和性も見出せない。同族の源氏に対しても、弟の範頼、義経に加えて、叔父の義憲、行家をも亡き者になっている。

このように物語の最終盤になって表面化する、権力に執着し保身を図る頼朝の姿は、史実のなかの頼朝が伊豆での挙兵以来持ち続けてきた性格であったとも考えられる。それを『平家物語』は、あるべき秩序の形成を語るために、捨象し隠蔽し続けてきたのだが、最終盤に至って、こうした頼朝の正当化を断念してしまふ。そこには、敗者や死者に寄り添おうとする『平家物語』の志向があった。戦乱によって殺され、痛み苦しんだ人々を尊ぶ『平家物語』は、報復や排除を伴わない平和を望み、この厭うべき報復や排除を進んで行おうとした頼朝に対しては、正当化を断念し、実像を誇張し、批判的な表現を行っている。

自己の権力維持のために強権を振るう頼朝の姿は、

秩序を担うにふさわしいあり方から逸脱している。このような頼朝の登場は、『平家物語』の求めるあるべき結末を描く場面にふさわしくない。『平家物語』はそのために大原御幸の場面を用意する必要があったのではないか。『平家物語』の灌頂巻を持つ諸本は、そこに頼朝をいっさい登場させることなく、後白河院と建礼門院が心を通わす親和的な記述をもって物語世界を閉じている。後白河院の御幸は、敗者の排除ではなく和解を図る行為として、物語の終末において非常に重要な意味を持つ。女院の六道語りを聞いて感激して「御涙にむせ」ぶ後白河院は、報復を過剰に危惧する頼朝と異なり、敗者の心情に寄り添う姿を見せている。それは、院に見捨てられ、頼朝の報復にも遭った平家の人々に対する慰撫であり、まさに秩序を担う人物に求められる姿勢である。この場面で涙を見せるのは後白河院だけではない。「供奉の公卿・殿上人も」、建礼門院と女房たちもみな涙を流している。そのような人々の涙は、親和的な関係性を象つたものであり、『平家物語』は秩序の帰趨をこの親和性に求めている。

なお、屋代本などのように、平家の子孫が絶えたことをもって全編を閉じる記述は、親和性への志向が覚一本ほどには強くないことを示している。そして、頼朝の果報めでたきことを語って物語を結ぶ延慶本は、

それ以前に、平家の子孫を残酷に亡き者にしていく姿を語り出していながら、なおもこの終幕において「仏法ヲ興シ、王法ヲ継ギ、一族ノ奢レルヲシヅメ、万民ノ愁ヲ宥メ、不忠ノ者ヲ退ケ、奉公ノ者ヲ賞シ、敢テ親疎ヲワカズ、全ク遠近ヲヘダテズ」と、理想的な為政者として頼朝を讃えている（巻第十二「右大将頼朝果報目出事」）。これは実に不思議な記述であり、親和性を重視する論理とは別な論理を見出す方向で、これを考えていく必要がある。

## おわりに

『平家物語』は、親しみ合い、支え合う関係をたいせつに描き出し、そのような関係を求める親和的な心性こそが表現世界の秩序を支えるものと捉えている。親和的な秩序を構築するなかで、虚構や史実の捨象を行い、治承・寿永の乱の歴史を独自に描き出しているのである。しかし同時に、歴史の実像も記述のなかに織り込んで語っているように、そこには、時代状況を凝視し、戦乱の敗者の側に寄り添う姿勢もうかがわれる。親和性を重んじているため史実を離れた記述を行いつつ、歴史の実像も同時に取り込んでいるところに、『平家物語』の表現のしたたかさが現れている。

本稿で取り上げた後白河院と頼朝の関係にかかわる記述のなかでは、とりわけ頼朝に親和性を付与する表現が際立っている。その一方で、物語の政治にかかわる記述において、後白河院の親和性は頼朝ほど強調されていないが、この両者による秩序の形成とは別な場面で、後白河院は、天皇家の家長として子と孫をあまねくたいせつに思う姿が描き出されることによって、既に親和的であることが明示されている。特に物語の前半において、後白河院は、高倉院との相思相愛の父子関係が描かれ、その関係が規範となって物語の前半世界の秩序を支えているほど、慈父としての親和性が強調されていた<sup>(19)</sup>。

この問題と関連して注目されるのが、高倉院と頼朝の関係がいったい語られていないことである。後白河院は、頼朝との関係を語り出されることで、政治的な意図を持つ権力者としての側面も垣間見せていたが、『平家物語』の高倉院は理想的な為政者としてのみ語られ、権力者としての側面の描出を避けられていた。そのために、頼朝との接点をまったく持たなかったと考えられる。そして、何よりも、頼朝の挙兵は、高倉院と安徳天皇にとっては、許すべからざる反乱に外ならなかった。高倉院と頼朝との関係は本来敵対的であり、『平家物語』は、この関係へのいっさいの言及を避

けざるを得なかったのではないか。

物語の末尾で記される後白河院と建礼門院の和解も秩序の帰趨を描く上で重要であるように、『平家物語』では様々な親和的な関係が語り出されてはじめて、表現世界の秩序が築き上げられるのである。今後もしそのような、不和と戦乱を描き出しながら親和性を重んずる『平家物語』の表現に注目し、そのしくみと本質についてさらに考えていきたい。

## 注

(1) このことについては、小稿『平家物語』における不和と親和―後白河院、高倉院をめぐる関係に着目して―(『日本文芸論叢』第二五号、二〇一六年三月)において、他者といっさい不和を起こさない高倉院の描かれ方に注目し、その無私無欲の親和性が規範となつて物語世界における秩序を支えているという表現のしくみについて論じている。

(2) 本稿の考察において、主な検討対象とする『平家物語』の諸本とテキストは次のとおりである。

覧一本―新日本古典文学大系(岩波書店)、屋代本―『高野本屋代本対照平家物語』(新典社、百二十句本―『百二十句本平家物語』(汲古書院)、延慶本―『校訂延慶本平家物語』(汲古書院)、長門本―『長門本平家物語』(勉誠出版)、源平盛衰記―巻第一―第四十二は、中世の文学(三弥井書店)、巻第四十三―第四十八は、『源

平盛衰記慶長古活字版』(勉誠社)、四部合戦状本―『四部合戦状本平家物語』(汲古書院)、源平闘諍録―講談社学術文庫『源平闘諍録上・下』。

また、本稿の考察で取り上げる、『平家物語』以外の書のテキストは次のとおりである。なお、本文の引用に際しての漢文の訓読は、私にそれを行った。

(3) 『玉葉』―名著刊行会、『吾妻鏡』―国史大系(吉川弘文館)、『百練抄』―国史大系(吉川弘文館)、『愚管抄』―日本古典文学大系(岩波書店)。

読み本では、頼朝が院宣を「頸に懸け」たのではなく、「石橋ノ合戦ノ時モ、白旗ノ上ニ此院宣ヲ横ニ結付ラレタリケルトゾ聞ヘシ」(延慶本・巻第五「文学京上シテ院宣申賜事」と、旗に結んで戦場で顯示していたという。この読み本の記述には、自身の挙兵の正当性を周囲に主張し誇示しようとする頼朝の姿勢が顕著である。

(4) 『吾妻鏡』第一の治承四年四月廿七日条には「當于此時令旨到来仍欲舉義兵寔惟天興取時至行謂歟(此の時に當たり、令旨到来す。仍つて義兵を舉げんと欲す。寔に惟天の興ふるを取り、時至りて行ふの謂か)」との記述が見られ、仁王の令旨を奉じて挙兵した頼朝の動向が確認できる。

(5) 武久堅「平家物語は何を語るか―「流人頼朝謀叛への共鳴」と、その物語的構築―」(『軍記と語り物』第四六号、二〇一〇年三月) 参照。

(6) 佐伯真一「平家物語遡源」(若草書房、一九九六年九月) 第四部「平家物語」の視点とその時代」参照。この論考では、朝敵を平らげて国家の安泰を保証する將軍像は、『平家物語』を含めた中世軍記物語においてはじめて形

成されたものであることも指摘されている。

(7) 十月宣旨については、『玉葉』寿永二年閏十月十三日条及び同廿二日条、『百練抄』寿永二年十月十四日条で確認できる。宣旨の文面自体は書き留められていないが、それらの記録から、頼朝の東国支配権を公認したものと推定される。また、この十月宣旨は、『平家物語』で記されている征夷將軍院宣と時期が重なっており、上横手雅敬氏は、『平家物語の虚構と真実』（講談社、一九七三年六月）において、『平家物語』の征夷將軍院宣についての記事は、十月宣旨の使者往還の記録をもとにしたものと指摘している。

(8) これは、山本幸司氏が著書、日本の歴史09『頼朝の天下草創』（講談社、二〇〇一年七月）において指摘している。「権力の正統性の源泉という地位に基づいて、新たに誕生する実質的権力の持ち主たちに対して承認を与える」（三九頁）という後白河院の権力のあり方が如実に現れた事例である。

(9) 福田晃「頼朝伊豆流離説話の生成—平家物語・曾我物語より」（『国語と国文学』第四三巻第六号、一九六六年六月。後に『軍記物語と民間伝承』へ岩崎美術社、一九七二年二月）に再録）参照。

(10) これについては、柳田洋一郎氏が『平家物語』における報復—紛争の底流からみた頼朝の平和—（『軍記物語の窓 第二集』、和泉書院、二〇〇二年十二月）において、また櫻井陽子氏が『平家物語』の征夷大將軍院宣をめぐる物語（『中世文学と隣接諸学』4『中世の軍記物語と歴史叙述』、竹林舎、二〇一一年四月）でそれぞれ報復／復讐譚としての『平家物語』の側面を指摘している。また、

寛一本には報復／復讐の要素が薄いことは、どちらの論考でも言及されている。

(11) 頼朝の父義朝に対する呼び方について、長門本、四部合戦状本では「亡父」と表記されているように、延慶本の「亡夫」が「亡父」の誤写と見て妥当であろう。

(12) 生形貴重『平家物語』の構造と構想の課題」（『軍記文学研究叢書』7『平家物語 批評と文化史』、汲古書院、一九九八年十一月）参照。

(13) 注（8）の山本幸司著、日本の歴史09『頼朝の天下草創』四一頁参照。

(14) 征夷將軍院宣について語る巻第八以前にも、頼朝が「鎌倉殿」と呼ばれることがあるが、物語世界の時間の現在を離れて「源氏の世になっ」た後の出来事を先取りして記す時にのみその呼称が用いられる。たとえば、巻第四の、以仁王が平家討伐の計画が発覚して園城寺に逃亡し、以仁王に仕える長谷部信連が王を捕らえにきた検非違使に単身で立ち向かったことを語る「信連」の段の末尾に、「源氏の世になって、東国へくだり、梶原平三景時について、事の根元一々次第に申ければ、鎌倉殿「神妙也」と感じおぼしめして、能登国に御恩かうぶりけるとぞ聞えし」と、頼朝が権勢を掌握した後に信連の勇猛さ聞き、感心して領地を与えたという後日譚が記されている。ただし、延慶本など一部の本文では、巻第七において頼朝と義仲の不仲をはじめて語る記述のなかにも「鎌倉殿」の呼称が見られる。それは二人の対立の構図のなかで、東国を支配している頼朝の優位性を示したものと考えられる。これは、早川厚一氏が『平家物語を読む—成立の謎をさぐる—』（和泉書院、二〇〇〇年三月）

の第二章において征夷將軍院宣の記述に注目して既に指摘している、將軍宣旨を受けた頼朝が、以仁王令旨により挙兵した義仲、行家を討伐するという図式に通底する記述と言えよう。

(15) ただし、屋代本、四部合戦状本、源平盛衰記では、後白河院と頼朝への批判となる重衡の言葉を書き記しておらず、重衡は平家が追討されることを「運尽テ」のこと、「先世宿業」と捉えた上で、中国の故事を引いて「疾々可被刎首」と潔く述べるだけである（屋代本・巻第十「同重衡頼朝対面以後狩野介預事」、四部合戦状本・巻第十「重衡頼朝対面」、源平盛衰記・巻第三十九「頼朝重衡対面」）。

(16) 延慶本では、重衡は頼朝に対して出家を願ってはいない。千手前を通して「何事モ、思食候ハム事ハ被仰候へ」という頼朝のいたわりの言葉を受けた時に、「何事ヲカハ。明日頸被切事モヤ有ラムズラン」と述べるだけである（巻第十「重衡卿千手前ト酒盛事」）。重衡の言葉を伝え聞いた頼朝は「頼朝ガ私ノ敵ニアラズ。争無左右可奉切」と語っており、これは他本のような重衡の出家をめぐる言及ではないものの、京の後白河院の意向を重んずる姿勢が現れている。

(17) 『玉葉』巻第四の文治元年十一月二十六日条、及び『吾妻鏡』第五の文治元年十一月十五日条に書き記されている頼朝の高階泰経宛ての書状に、「日本國第一之大天狗」という表現が見られる。この言葉については、高階泰経に向けられたものと捉える見方もあるが、後白河院を意識しての言葉と考えることとする。

(18) 水原一氏は「源頼朝」（『国文学 解釈と教材の研究』第一二巻第四号、一九六七年三月）において、平家の残党

狩りの描写から頼朝の「桀紂的イメージ」、「巨魔の容貌」を見出している。

(19) このことについては注（1）の小稿で詳しく論じた。

## A study of the formation of order in Heike Monogatari: Focusing on the relationship between Go- Shirakawa-in and Minamoto no Yoritomo

Le YU

Heike Monogatari is a historical novel which delineates the Genpei War and the conflicts between political and religious groups during the time period. In this novel, Go-shirakawa-in and Minamoto no Yoritomo provoked conflicts without hesitation, and used their royal authority and military power to suppress rebellions. Yet, they expressed intention to cooperate with each other. The purpose of this article is to analyze how the harmonious relationship between Go-shirakawa-in and Yoritomo was described and the significance of this relationship in Heike Monogatari.

It is known that Fukuhara Decree and the decree appointing Yoritomo supreme commander of the imperial forces, issued by Go-shirakawa-in, were fictions by Heike Monogatari. This article proposes that the fictions about the decrees were created to describe Yoritomo as one who has no intention to cause any conflicts even with his enemy, Heike, and is not eager for power. This suggests that he is the eligible person to build up and to maintain order with Go-shirakawa-in.

On the other hand, this article also points out that the order built up by Go-shirakawa-in and Yoritomo was not perfect and not free of conflicts, by delineating how Taira no Shigehira was treated after he became a captive in Heike Monogatari. Also, in the end of the novel, conflicts between Go-shirakawa-in and Yoritomo turned up and Yoritomo was then described as one with no mercy and with no intention to avoid conflicts. This article suggests that these descriptions which show the opposite intentions with the fictions of the two decrees, were due to the sympathies for people who were killed in the war. Heike Monogatari attempted to describe the harmonious order built up by Go-shirakawa-in and Yoritomo without conflicts, but also had an intention to make its description close to the history and show sympathies for people who had suffered in the war.